

## 高校生の手先の器用さに関する意識と実態

○東学大 鳴海多恵子 都立短大 川端博子 弘前大 日景弥生

<目的>家庭科の被服製作学習に対する生徒の関心や技能レベルの低下がみられ、意欲的に取り組める被服製作教育のあり方について早急に検討する必要がある。意欲の低下の一因として、器用さに対する自己評価が関与していることが伺われるが、今回、高校生を対象に手指の器用さに関する意識と実際の手指の巧緻性との関連を明かにし、被服製作教育の方法に関する考察を行った。

<方法>調査の対象者は、東京と神奈川の高校の1年生男女約550名であり、アンケートと作業テストを実施した。アンケートでは、①属性、②手先の器用さに対する自己評価とその理由、③性格的特性等に関して質問を行った。作業テストとして、糸結びテスト、点打ち、両手共応、目測テストを実施し、手指の巧緻性を多元的にとらえることを試みた。

<結果と考察>器用さに関する生徒の自己評価は、器用だと評価する生徒は約3割であり、全体として自分を不器用だと評価する傾向が強いことがわかった。器用評価群と不器用評価群に分けて特徴をとらえた所、器用評価群では「他者からよい評価を受けた」ことを理由とし、「集中力」や「作業効率」の点で自信があり、作業テストも優れた成績を示した。不器用評価群では、「他との比較により自分を劣っていると評価する」傾向が見られ、日常的にも手先を使う作業をしていないことがわかった。更に、器用さの実態と自己評価にずれを有する生徒の特徴について分析した結果、自信家は、男子に多くみられた。不器用だと過小評価する生徒は女子に多くみられ、自らを厳しく評価することが原因と推測された。被服製作学習の指導にあたっては、自信を抱かせることが必要と考察された。